

# 経済学と聖書(7)

2020年6月19日(金)

関西学院大学経済学部

春学期チャペル

担当：井口 泰

- 1 主なるイエスはわが喜び、誉れなり。  
 久しく王をわれは慕い、待ち望む。  
 神の小羊、  
 わが花婿なる主を喜ぶ。
- 2 み翼もて、われを覆い、守りたもう。  
 何を恐れん、たとい悪魔脅すとも。  
陰府のちからが われに迫るとも  
 主ともにあり。
- 3 別れつげよ、過ぎゆく世の虚しさに。  
 別れつげよ、世の誘い、世の誉れ。  
 われは求めず 朽ちる世の栄え。  
 イエスに頼らん。
- 4 去れ、悲しみ。わが喜び、主は来ます。  
 主にありては わが悲しみ、喜びに。  
 責めとそしりの世にわれは耐えて、  
 主を喜ぶ。

**1 Jesu, meine Freude,**  
meines Herzens Weide,  
 Jesu, meine Zier.  
 Ach, wie lang, ach lange  
 ist dem Herzen bage,  
 und verlangt nach dir!  
Gottes Lamm, mein Bräutigam,  
 außer dir soll mir auf Erden  
nichts sonst Liebers werden.

2 Unter deinem Schirmen  
bin ich vor den Stürmen  
 aller Feinde frei.  
 Lass den Satan wittern,  
 lass den Feind erbittern,  
 mir steht Jesus bei!  
 Ob es itzt gleich kracht und blitzt,  
 ob gleich Sünd und Hölle schrecken;  
Jesus will mich decken.

3 Trotz dem alten Drachen,  
trotz des Todes Rachen,  
 trotz der Furcht darzu!  
 Tobe, Welt, und springe;  
 ich steh hier und singe  
 in gar sichrer Ruh!  
 Gottes Macht hält mich in acht;  
Erd und Abgrund muss verstummen,  
 ob sie noch so brummen.

4 Weg mit allen Schätzen,  
 du bist mein Ergötzen,  
 Jesu, meine Lust!  
 Weg, ihr eitlen Ehren,  
 ich mag euch nicht hören,  
 bleibt mir unbewusst!  
 Elend, Not, Kreuz, Schmach und Tod  
 soll mich, ob ich viel muß leiden,  
 nicht von Jesu scheiden.

## マタイ 13:10-13 「経済格差と健康」

「弟子たちが近寄って来て、イエスに言った。「なぜ、彼らにたとえでお話しになったのですか。」イエスは答えて言われた。「あなたがたには、天の御国の奥義を知ることが許されているが、彼らには許されていません。というのは、持っている者はさらに与えられて豊かになり、持たない者は持っているものまでも取り上げられてしまうからです。わたしが彼らにたとえで話すのは、彼らは見てはいるが見ず、聞いてはいるが聞かず、また、悟ることもしないからです。こうしてイザヤの告げた預言が彼らの上に実現したのです。『あなたがたは確かに聞きはするが、決して悟らない。確かに見てはいるが、決してわからない。この民の心は鈍くなり、その耳は遠く、目はつぶっているからである。それは、彼らがその目で見、その耳で聞き、その心で悟って立ち返り、わたしにいやされることのないためである。』」

福音書のこのくだりは、富む者がますます富み、貧しき者がますます貧しくなるという意味で理解され、「マタイの法則」として知られています。アメリカでは経済学の教科書にも、経営学の入門書に紹介されます。このイエス様の言葉は一見簡単そうですが、なぜなのか、どうしてなのかを説明するのは決して簡単でないのです。実は、イエス様は、マタイ25:29でも、ルカ19:26でも、マルコ4:25でも、「天の御国」とは何かを語るたとえ話のなかで、同じことを語っておられるのを、読んでください。

現代の私たちは、豊かさと貧しさを語るとき、物質的な豊かさや貧しさと、精神的な豊かさや貧しさを分けて考えるようになってきました。今世紀の初めに流行になった「幸福の経済学」では、物質的な豊かさが、必ずしも、精神的な豊かさを意味しないことを強調するようになりました。あたかも、現代人は、精神と肉体が分離しているかのようです。ここで重要なことは、福音書は、人間の精神と肉体を分離して考えていないことです。

欧州各地の歴史ある教会を訪ねると、会堂の地下には墓地があります。特に、12世紀から15世紀にかけて、その土地を支配した諸侯や貴族とその家族の墓をみると、10歳代から20歳代で亡くなっています。ペストによって亡くなったと思われる高貴な人々が墓がなんと多いことでしょう。実は、感染症の蔓延で、会堂の地下に埋葬する場所もなくなり、遺体からの感染の危険が高まり、次第に、会堂から墓地が分離されてきました。16世紀の宗教改革の時代にも、健康だったカソリックの司祭や僧侶の多くが、ある日突然倒れ、亡くなりました。カソリック教会の儀式や祈りは、感染症に対しては硬直的で無力であり、そのことも、教権が当時の人々の信頼を失っていった背景とみられています。これに対し、プロテスタントに転換した都市を中心に、公衆衛生、疾病対策や貧困対策などは、教会から、都市行政へと、分離していったのです。

ペストという感染症は、都市封鎖や隔離などの対策のないところで、所得や富の多寡に関係なく、人々の命を容赦なく奪ったようにみえます。しかし、十分に証明されてはいませんが、中世末期には、感染症によって労働力が不足し、賃金が上昇したという仮説が主張されています。

新型コロナウイルスのパンデミックの最中にある現在も、「感染症は人を選ばない」という考えが、崩れてきました。即ち、感染症は、経済的に貧しい者や、劣悪な環境に住む人たちの、集中的に襲ってくるという根拠が見つかっています。アメリカでは、ニューヨーク市長が、市民生活を支える現場で働く人々の感染リスクも死亡率も高いことを訴えました。それは、黒人やヒスパニック系に集中していると言うのです。

こうしたなかで、アメリカの南部ミネアポリス市で、白人警官の行動が、黒人男性を死亡させる事件に発展し、全米で人種差別反対の抗議行動が拡大しています。この動きは、翌週に欧州の主要都市に広がりました。6月14日日曜には、東京・大阪でも、外国人のだけでなく、外国人を親にもつ日本人も、差別の廃止をもとめて千人規模ですが、抗議行動が起きています。

日本では、1990年代から、雇用の非正規化の動きが強まり、正社員とパート・アルバイト・派遣社員などの中には、雇用の不安定ばかりでなく、賃金や処遇の面で正社員との格差が放置されてきました。そういう格差を放置したまま、非正規雇用を拡大することが、問題を深刻にしてしまったのです。本年4月、改正有期雇用・パート労働法によって、罰則こそありませんが「同一労働同一賃金の原則」が法定され、合理的な理由のない格差に対して企業に対し、民事訴訟を提起する法的根拠が明文化されました。

同時に忘れてはならないのは、非正規雇用者は、同時に国民健康保険の保険料未納事案の多くを占め、十分な医学的治療を受けていない実態があることです。また、健康保険に加入している正社員といえども、病気になった場合に有給で病気休暇をとる権利は保障されておらず、体調不良でも働かざるをえないのです。テレワークの拡大は、大手企業では広がっていますが、依然として、中小企業やサービス産業などでは、普及拡大は簡単ではありません。

現代における「マタイの法則」には、経済格差が、健康格差を引き起こし、それが、経済格差を拡大するメカニズムが作用しつつあると思われます。ニューヨークでも、マンハッタン島の感染症拡大で、セカンドハウスを持つ富裕層は、ロングアイランドなど、安全な別荘地に多数避難した模様です。

先進諸国では、ロックダウン(都市封鎖)により経済活動が低下したにもかかわらず、政府による巨大な財政支援と、中央銀行による無際限の金融緩和が株価を急回復させています。アメリカの連邦準備制度理事会によれば、同国の上位10%の富裕層が、流通する株式の90%を保有していると伝えられます。これは、経済がマイナス成長に転落し、失業が増加し賃金が低下するなかで、資産を保有する層と保有しない層の間の経済格差が、一層拡大することを意味します。

これは、2014年のトマ・ピケッティ『21世紀の資本』が指摘していることを思い出させます(資産成長率 $R >$  所得成長率 $G$ )。しかし、もっと重要なのは、現代の経済格差は、健康格差を媒介し、拡大することです。それは、2019年ノーベル経済学賞のバナジーとデュプロの発見を想起させるのです。

ルカによる福音書は、物質的又は精神的な豊かさと貧しさを区別してはいません。そこでは、「貧しい人たちは、幸いである。神の国はあなた方のものである」(6:20)と語ります。間違えないでください。イエス様は、貧しいこと自体が尊いと言っておられるわけではありません。これに対し、富んだ人は、現状に満足し変化を嫌うから、イエス様にとっては、消え去るべき存在です。貧しい人は、現在の世界に甘んじず、来るべき世界に希望をもつからこそ祝福されているのであり、新しい世界を築く力になるべき人たちなのです。

こうした経済格差を放置することは、社会における人々の信頼を失わせ、社会を混乱と崩壊の危機に追い込むことになることを、警戒しなければならないと思います。